

青年の老後観、扶養観に影響する要因について  
山口女子大家政 中間美砂子

目的 高齢化社会の到来に伴って、老人問題は国民的課題となり、青年にとっても、老人扶養の問題及び自分の老後の生き方の問題は切実な問題となつてきてゐる。そこで青年の扶養観、老後観が何によつて形成されるのか、その影響要因を探ることにより高齢化社会への対応のための示唆を得ることを目的として本調査を実施した。

方法 山口県下の大学生 589人を対象に昭和57年6月～7月に調査を実施した。調査は集団で実施し、担当者が直接調査票を配布し、回収した。従つて回収率は100%である。

結果 1 理念としての扶養観は、性別で大きく異り、男子の方が伝統的考え方を持つ者が多く、女子の方が社会化希望傾向が強い。

2 自分の両親の扶養についての考え方は、性別、きょうだい関係、両親の職業等で異り、男子、長子、長男、父有職、母有職の場合の方が扶養希望は強い。配偶者の両親の場合については、女子、郡部出身者の場合の方が高い。

3 祖父母との関係別に両親の扶養希望をみると、祖父母との同居歴が長く、コミュニケーションの程度、親和度が高い者の方が高く、配偶者の両親の場合についても同様である。

4 老後観は性別で大きく異り、男子の方が自立希望が強い。祖父母との関係別では、祖父母との同居歴が長く、コミュニケーションの程度、親和度が低い者の方が、経済的自立意欲、別居希望は高い。